

アウグスティヌス国際学会報告

宮 谷 宣 史

2001年4月1日から7日まで、アウグスティヌスにゆかりの地、アルジェリアのアルジェとアンナバの2か所を会場にして、「アルジェリアの哲学者・アウグスティヌスに関する第1回国際シンポジウム——アウグスティヌス アフリカ性と普遍性——」(1er Colloque international sur le Philosophe algérien Augustin—Augustin Africanité et universalité)が開催された。研究発表者は14カ国から40名(フランス9, アルジェリア6, スイス6, オーストリア, USA, イタリア, 英国が各3, エジプト, カナダ, ドイツ, チリ, ベルギー, オランダ, 日本が各1)で、参加者は、アウグスティヌス研究者と一般のひとを含めて、外国(主としてヨーロッパ諸国)とアルジェリアを中心にしたアフリカ諸国から約200名以上、会の実行にかかわったイスラム高等法院の関係者たち、それに現地や外国からのジャーナリストも多く加わり、盛大な国際学会であった。

この会議は、しかし、普通の国際学会とは異なり、かなり特異な性格のものであったので、この点について述べておきたい。そのさい、一般の学会報告では記されない非学問的な要因について多くふれることになるのを了承して頂きたい。しかし、それでもアウグスティヌスに関する国際学会がこのような形で開催される、ということは、彼の人物と思想に関わる面もあるゆえに、偶然ではなく、むしろ大変興味深いとも受け取れるのではなかろうか。

まず、この会議は、国連の定めた「2001年 諸文明間対話の年」に呼応するかたちで、国連とアルジェリアが協力し、それにスイスが経済的・学問的に援助して実現したものであった。そのため、今回の学会関係のプログラムその他の印刷物には、すべて上記の主題や会議名の前に「2001年 諸文明間対話の年」(2001 Année du dialogue des civilisations)と明記されている。周知のように、1998年9月、イランの

ムハンマド・ハタミ大統領が国連総会で演説を行い、国際平和のために対話の必要性を訴えたのがきっかけとなり、同年11月に国連は、2001年を諸文明間対話の年とすることを決議した。そしてさらに、2001年2月に国連のコフィ・アナン事務総長は、改めて文明間の対話が世界平和のために必要であることを強調した。このような意図と主題のもとに、2001年はいろいろな行事が行われたが、本学会もその1つである。アウグスティヌスが、たとえば、『神の国』第19巻で、平和の問題を精力的に論じていることを思えば、この関連づけは決して無理ではない、と言えよう。

次に、この国際学会を具体的に準備し、主催したのはアルジェリア民主人民共和国政府と同国のイスラム高等法院であった。そこで、国連の決議との関連からみれば、「イスラムとキリスト教の対話」という狙いと内容をもつ会議として位置付けられた。そこで主題としては、アルジェリアに関係のある、またヨーロッパの教師であり、同時にアフリカの哲学者であるアウグスティヌスが選ばれた、と言えよう。そして、アウグスティヌスにおいて、アフリカ性と普遍性をみることで、また、アウグスティヌスを手がかりにして、イスラムとキリスト教の対話を試みようとした。スイス人で学会の成立に協力したひとたちから聞いた話では、準備の最終段階になってから、アルジェリア側から、「アルジェリアの哲学者」という表題が提案され、付加されたようである。その結果、人類の歴史で重要な意味をもつアウグスティヌスがアルジェリア人であったことが強調され、しかも彼はイスラム以前にでた世界的な哲学者であること（普通、アウグスティヌスの名前の前につく「聖」がないことに注意）、しかもこれらの事実を長い間忘れていた点を新たに指摘するかたちとなり、それに政府の積極的な取り組みと宣伝もあったため、マスコミの注目を広く集めた。

ところで、この学会がアルジェリアで開催されたことは、もちろん、この国が地理的に、アウグスティヌスにゆかりの場所である、という歴史と深い関連があるが、しかし、理由は今回の場合それだけではない。実際、この点に関してこれ以外の理由がいくつか挙げられる。まず、現在のアルジェリアの国の状況に注目する必要がある。

アルジェリアは1962年に独立を達成した、この後、社会主義の方向で国創りが進められた。私は、1970年代に、アウグスティヌスの伝記を書くために2度調査と取材にでかけて、かなり長く滞在した経験をもっているが、国創りに励む国民の姿にふれ、また安全に旅行することができて、いい印象を抱いている。その後、1989年に憲法が改正され、政治の民主化がすすめられたが、しかし、1991年代に入り、総選挙が行わ

れ、その結果をきっかけに、イスラム救国戦線と軍部との対立が起こり、それがクーデターにまで発展した。その後反政府テロが続発し、92年2月から国家非常事態宣言がだされ、その状態が現在まで続いている。それは内戦状態で、国中に危険がある。この10年間にテロの犠牲者が10万人以上も出ている。私が到着した3月31日に目にした新聞(La Tribune)の第1面全体には、上下に2つの大きな記事が載っていた。上半分には、前日アルジェの近くの、ローマ時代の遺跡で有名なティパサで、5名がテロの犠牲になった、と写真いりで大きく報じられていた。その下半分には、アウグスティヌスに関する国際学会についての詳しい記事があった。このような状況であったために、学会に招かれた学者でも参加しなかったひともあり、また、われわれも空港へ到着したその時から、帰る瞬間まで、滞在している間、会議のさいにも、移動するときも、常に厳重な警護と幾重にもなされる身分チェックを受けた。では、このような状況であるにもかかわらず、何故、アウグスティヌス国際学会を開催したのであるうか。

そこで、本学会を実現させるために尽力したアルジェリア大統領ブーテリカに注目しなければならない。また同時にブーテリカ大統領が「わか師」と仰ぐ、著名なアウグスティヌス学者、A. Mandouze 前ソルボンヌ大学教授の存在と働きが今回の学会のために非常に大きな意味を持っている点を指摘しなければならない。マンドゥーズは1946年から1956年までアルジェリアで教育活動に従事し、たとえば、そのさいラテン語を教え、古典語と古代の思想家の重要性を語り、また後の国民解放前線(FNL)の指導者を育成し、アルジェリア独立を援助した。それゆえ、彼はフランスから裏切り者として逮捕され、一時期獄中で過ごした。しかし、まさにこの故に、マンドゥーズは1963年、アルジェ大学の初代の学長に選ばれた。ブーテリカはこの時、大学で学び、マンドゥーズの影響を受けた。今回の学会でも、マンドゥーズは、高齢であるにも関わらず、学会全体を方向づけ、また運営していく面で、もっとも重要な役割を果たした。たとえば、彼は本学会のために小冊子『聖アウグスティヌス』(フランス語とアラブ語)を執筆、出版し配付した。また、ブーテリカは政府の歓迎会に先立ち、前参加者の前で、アウグスティヌスの意義について、熱のこもった演説をした。この意味で、今回の学会はこの師弟コンビによるところが大きい、と言える。

ところで、ブーテリカは国民緩和政策をかかげ、1999年5月に大統領に就任した。そして、よく知られているように、彼は非合法化されているイスラム政党の元メンバ

一らによる民主化を検討し、国民和解法によって政治犯を釈放したり、新たな対話と民主化運動に積極的に取り組みはじめた。また彼は大統領就任直後にスイスを訪問し、フリースブル大学教授であった外務大臣および同大学の元副学長であり、アウグスティヌス研究者として著名な O.ヴェルメルンガー教授とあい、平和と対話、寛容と和解の道を進め、また示すための国際学会について相談している。その結果、今回のアウグスティヌス学会が計画され、学問的な面で、また経済的な面でスイスのアウグスティヌス研究者たちとスイス政府、それに国連が全面的に協力することになった。たとえば、そのために、今回の学会の準備（アウグスティヌスの基本的な文献表や関連地域の美しい写真集など、多くの出版物）、研究発表者の選任とそのための経済的な援助（招待者の交通費と滞在費はすべてスイス政府によって負担された）、世界各国におけるアウグスティヌスの著作およびその翻訳書と基本的な研究書などの実物の収集、アルジェリア国立図書館でのその展示会など、また、アルジェリアのアウグスティヌスゆかりの地における、展示や催しなど、多くの行事が企画されまた実現した。そして学会参加者もこれらの場所と催しに招待された。

今回の学会にさいしては、スイスのフリースブル大学とそれに協力してローマの「教父学研究所」(Augustinianum) が学会での発題者と参加者を選んだために、ローマ・カトリック教会関係の学者が多く（フランス、イタリア、スペインなど）、またヨーロッパから多く選ばれていた。プロテスタントからはわずか4名であった。またアジアからは日本だけで、加藤信朗氏と私の2名が招かれたが、加藤氏は健康上の理由で参加できなかったのは、残念であった。

さて、前置きな長くなったが、ここで学会の様子を少し述べておきたい。学会で焦点になったのは、たとえば、アウグスティヌスがアフリカ人であることは確かだが、ベルベル人であったか、どうか、をめぐり激しい議論があった。問題や議論が紛糾すると、S. Lancel 教授の意見がしばしば求められた。それは、P. Brown 以後出されたアウグスティヌスの伝記では、彼のものが最も詳しく、高く評価されているからである。解答にあたりランセルは極めて慎重で、資料的にはっきりしないので、ベルベル人とは断定できない、と答えていた。それに対して、モニカがベルベル人なのだから、アウグスティヌスもベルベル人とみなしていいのではないかと、との意見があった。

今回、主題にも上がっているように、アウグスティヌスのアフリカ性と普遍性を巡る議論も多くあった。そのさい、アウグスティヌスとドナティストとの関係、キルク

ムケリオーネスとの関係、エクランのユリアヌスとの論争におけるアウグスティヌスのアフリカ性の問題などが取り上げられた。それに、アウグスティヌスがイスラム世界でどのように理解されたり、受け入れられたのか、彼の思想や著作がどの程度イスラム世界で翻訳されていたのか、などに関して、従来あまり知られていなかった面に関する研究発表がいくつかあり、興味深かった。

紙幅が尽きたので、以下注目を集めた発表の一部を挙げておく。

S. Lancel 「アフリカ性とローマ性の間。普遍性へのアウグスティヌスの道」、M. Coyle 「北アフリカのキリスト教におけるアウグスティヌスの自意識」、J. van Oort 「北アフリカにおけるアウグスティヌスとマニ教」、M. Cheikh 「イスラムにおける予定と自由意志」、M. Markus 「アウグスティヌスの神学におけるアフリカ性と普遍性」、M. Rudolph 「アラブ人アウグスティヌス」、M. Ben Mansour 「12世紀のマグレブにおけるアウグスティヌスの痕跡」、M. Bouchenaki 「アウグスティヌスとアフリカ性歴史とタガステ、ヒッポ、カルタゴの遺跡の研究から」、Z. Mahmond 「アウグスティヌスによる歴史の神学」。これ以外でも、G. Madec, Di Bernardino, B. Studer, W. Geerlings, A. Schindler, C. Lapelley, J. O'Donnell など、世界の代表的なアウグスティヌス研究者たちが参加しており、活発な議論がなされたので、極めて刺激的で、有意義な学会であった。

オーストラリアの教父研究

出村和彦

筆者は2001年度、ブリスベンのオーストラリア・カトリック大学 Australian Catholic University (ACU) の初期キリスト教研究センター The Centre for Early Christian Studies に、客員研究教授として一年ほど滞在する機会を得た。この研究所（以下センターと略す）の活動（より詳しくはホームページ www.acu.edu.au/Earlychr/ を参照のこと、以下 HP）を中心に、私が知る限りのオーストラリアでの古代中世哲